

基調講演

11:00～12:30



未来ある子どもたちのために ～私たち一人一人ができること～

講師 大沼 えり子氏 (認定特定非営利活動法人ロージーベル理事長
作家・保護司・シンガーソングライター
DJ Rosy)



(オープニングの音楽)

皆様、こんにちは。DJ Rosy こと大沼えり子でございます。今日は「子どもの虐待防止推進全国フォーラム in みやぎ」にお招きいただきまし

て、誠にありがとうございます。私がどんなお役に立てるかどうか分かりませんが、今から1時間半の時間を賜ってございます。本当に貴重な時間だと思います。精一杯務めさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

(音楽終了)

改めまして、初めまして。じゃない方もいらっしゃると思いますが、DJ Rosy こと大沼えり子でござい

ます。今日は児童虐待に関することということで厚生労働省のほうからお話を賜りまして、何か役に立てるのかなと思いつつ、ここに立たせていただいております。

実は私、日本中で講演していますけれども、必ずこのオープニングから始めさせていただいています。私はDJ Rosyとして18歳のときには宮城県の某放送局にDJとして勤めることができ、そしてその後、東京に参りました。結婚をしまして、一度休んだのですが、また21年ほど前からDJを始め、18年前から、ここからが大事なところですが、東北地方と北海道にあります3つの少年院に向けてディスクジョッキーの番組を月に1回、1時間の番組を制作し送り続けており、そのオープニングを疑似体験していただきました。

ですから、少年院の中で、いろいろな環境の中で育ってきて、非行に走ってしまった子どもたち、きちんとした教育も受けられない、愛情をかけてもらえなかった、そんな子どもたちが何とか社会復帰に向けて、社会でみんなと同じように足並みをそろえて、そして生きていけるように教育を受ける。

少年院というところは、もちろん御存じのように「Juvenile Training School」です。日本の少年法は、今のところですが、20歳まではほとんどの少年たちが保護ということになっています。ですから、少年院で保護をしながら、社会復帰に向けていろいろな教育をしてあげよう、再教育をしてあげようというのが少年院ですね。その少年院の中で、今まで教育も受けず、何もきちっとした生活ができていない子どもたちが、朝の6時や7時から夜の9時や10時まで、きちっとしたカリキュラムの中でその生活を送っていくということは、青春時代の一番楽しい多感な時期にとっても苦しいものだと私は思います。それを強いられる、なぜそうされなければいけないかということもありますが、してもらえてありがたいと思っている人は誰もいないと思いますが、でも、そうせざるを得ない、そんな社会になっていて、その中で彼らは、朝から晩まで一生懸命、そのカリキュラムに取り組む中で、つらいこと、苦しいことのほうが多いと本人たちは言っております。その中で月に1回のこのディスクジョッキーが本当に楽しみだということで楽しみにしてくれている、そのオープニングです。

だから、このチャカチャカと音楽が鳴って「Hello, This is Rosy.」という言葉、声を子どもたちはどれだけそれを支えにカリキュラム、仕事に頑張っているか、勉強やそういうものを頑張っているかということと想像していただけたらいいのかなと思います。

さて、そのディスクジョッキーを始めたきっかけ、これは私が保護司という職務についたことがきっかけでした。ここからがRosyの物語ですが、その前に必ず私は三つのお断りをさせていただいています。どこに行っても、お話の前に三つのお断りとお許しをいただいておりますので、そのことをまずは話させていただきます。時間が短くなるので、早めに言います。

まず一つは、大丈夫そうな気がします、今日は。でも、お話をするのがかなり早いと思います。今は

すごく意識してゆっくりしゃべっているのですが、徐々に興奮すると早くなってまいります。そのときには、もし、「今、何言ったか分かんないよ」というときには、是非とも挙手をしていただくなり、「もう一遍」と言っていただくなり、その場でお声を上げてください。もしくは手を上げていただければ、もう一度リピートさせていただきたいと思います。というのは、もう皆様の中には二度とお会いしない方々も多分おられると思いますし、せっかくこの貴重な時間ですので、この時間を無駄にしてほしくないと思います。ですから、できれば一言一句とは申しませんが、大体の内容を把握していただけるためにも、分からなかったときにはそのような御協力をお願いしたいと思います。これが一つです。

もう一つは、私、本当に皆様におわびを申し上げなければいけないと思うのですが、すばらしい立て看板と、このような華々しい会に、そしてこんな高いところに立たせていただいておりますが、私、どこに行っても、私は背が小さいから、皆さんとアイコンタクトをとれるように高いところにいると認識を持っていたければありがたいと思いますけれども、実はいつも講演という感じがしていません。ですから、パワーポイントもなければホワイトボードもございません。私は今日、皆様とお話をさせていただきたいと思っています。お一人お一人の皆様と、皆さんの隣や向かい側にいて、そしてこんな話なの、こんなことがあったの、だからこうできたらいいよね、だからこうしようよ、こんな会話のようにお話をさせていただきたいと思っていますので、どうぞその大沼の思いを皆様受け取っていただきたいと思います。

ですから、会場もそのまま明るくさせていただいておりますし、皆様のお顔を隅々の方々とアイコンタクトがとれるように、このように明るくさせていただいておりますので、お話をしてください。これが二つ目です。

三つ目は、私、10月まで8年間、宮城県教育委員、後半は第一職務代行をさせていただいております。いろいろなことを勉強させていただきました。提案もさせていただきました。けれども、教育委員とか、いわゆる固い感じが私はとても苦手です。こうした高いところとか、それから放送業界もそうなのですが、放送禁止用語とかいろいろありますが、私

の仕事、それから向き合う少年たち、親御さんたち、そういった今の保護司としての活動、それから 24 時間の電話相談を、もう 10 年以上やっていますが、そのことも含め、やはり敬語とか立派な言葉ばかりをしゃべっているわけにはいかなくて、その場に行きますと、どうしても「こうだよな」「こうだね」「冗談じゃないよね」とか、そういう言葉がときどき出てしまいます。気を付けてはおりますけれども、このような場所で発言するには適切でない表現や、適切でない言葉がひょっと気を緩めると出てくる可能性がございますが、それに関しましてはお許しをいただきますとともに、今日、私をここに呼んでしまった怖いもの知らずの副大臣、さっきいらっしゃいました、事務局の皆さんの責任ということで、私は全く責任をとらないという、こういう暗黙の了解のうちに、もし何か苦情がございましたら、私ではなくそちらのほうにお願いしたいと思います。

この三つをお許しいただき、御協力を賜りまして、お話に入りたいと思います。どうぞ一緒に話を聞いてください。

私、今の年齢を言うつもりはないんですけども、保護司の委嘱を受けるに当たりまして、それまでの経緯があります。私は、先ほど DJ のお話をしましたけれども、おじいちゃんが北海道警察の警視だったり、父が教育者だったり、母が法務関係の仕事をしていたり、非常に固いところで育ったので、保護司という存在は全く知りませんでした。それから、非行という言葉、犯罪という言葉、そういうことをやる人は、私と違う世界の人間だとずっと思っていました。

もう一つ、虐待という言葉、動物虐待とかはよく聞いていましたけれども、それでも腹が立って泣きたくなるほどだったのですが、児童虐待という言葉というものは、私は保護司になるまで近くにはありませんでした。それが、保護司の委嘱を受けた途端に目の前にどんと立ちただかるようになりました。その保護司になったきっかけを簡単にお話をさせていただきます。いつもこれが長くなってしまって、これで終わってしまうので、簡単に話をさせていたきたいと思います。

私は、家族に恵まれて、たくさんの愛情をもらって育ちました。本当に父はいつも「おまえは」——えり子といいます、私は——「えり子が一番下の子

だから、お父さんたちと一緒にいる時間が一番少ないんだ。だから一番かわいいんだよ」、その言葉を幾つになっても言ってくれる父でした。だから、私はいつも父や母に守られて、何かがあれば姉が助けてくれて、そうやって育ってきました。だから、好きなことばかりやって、わがままもいっぱいしました。でも、それでもみんな守ってくれて愛してくれました。

でも、実は父の反対を押し切って、私は大学を出て東京に出ました。音楽がやりたかった。ディスクジョッキーがやりたかった。アナウンサーもやりたかった。そして、父の反対を押し切って東京に出ました。とても楽しかったです。いろいろな仕事ができることができました。放送界、業界、いろいろな人たちと出会うことができ、全てが楽しかったです。でも、神様がそうしたのかもしれませんが、23 歳のときに、ちょうどこちらの宮城県の東日本放送というところがありまして、そこでレギュラーの番組を持っていたのですが、途中で倒れました。

自分で、どうなるかな、まだ大丈夫、ご飯が食べられるうちは大丈夫と、テレビに映る自分がどんどんひどい顔になっていくのに、どんなにメイクを駆使してもひどくなっていくのに、途中でだけはやめたくない、そう思って頑張ってきましたが、最後のところ、2 月の段階になったときにラーメンの 1 本がすすれなくなりました。そして自分で、もう駄目だなと思って病院に行きました。そうしましたら、もう 1 週間生きられていたらその後も生きられるかもしれないという劇症肝炎というのにかかっていたことが分かりました。それで、東京の住居を引き払い、とにかく即入院となりました。

当時はいろいろな番組が決まっていたり、4 月からの番組も決まっていたのですが、全てを降板するしかなくなりました。それでも、番組では私を待っていてくれて代役を立ててくれていました。しかし、もうここで自分が切らなければいけないと思って、業界を去ることを決めました。

私は、1 週間で死ぬかもしれないのですが、何とか生き延びることができました。当時は 98% の死亡率と言われていて、その 2% に残ることができました。そのときに、自分がもう死ぬんだと思ったときに一番最初に何を考えたかという、私は親孝行していなかったなと思いました。それから誰の

ためにも生きてなかったなと思いました。自分勝手に生きて、そして結婚もするつもりがない、そんなことを思いながら、もし生きることができたら、まずは親孝行をしよう、そして何かの役に立てるような人になろう。何より家族を持ち、子どもを産んで育てよう、そういうふうに思いました。

病気が治るまで大体4年、5年ぐらいかかりました。でも、ちょうどそのときに巡り合う方がいて、父と一緒に仕事をした方で信頼し合っている方が「この人はどうだ」ということで会わせてくれました、見合い結婚することができました。

見合いしたその次のデートで、主人と父が意気投合しまして、結納の日取りが決まりました。ここ笑っていただいて結構でございます。それで3回目のデートのときに、結婚式の日取りが決まったということで、とんとんとんと、結婚ってこういうものかな、でも父が「あの人は間違いない」と言っているから間違いないだろうと、そう思って結婚しました。間違いなかったかどうかは、死ぬまでまだ分からないので、途中経過はいろいろありますが、一つだけ、私の誤算があったのです。

私、病気はしていましたが、いろいろな仕事でできていました。その仕事を継続してもいいという条件で結婚したつもりでおりました。しかしながら、結婚式の日、皆さんはもっと大きな披露宴をされたかもしれませんが、私が結婚式に呼んだ人は50人弱の、本当に私をお祝いしてくれる人たちだけを結婚式に呼んでいました。そうしましたら、式場のドアがぱっと開いた途端に、360人ぐらいたったので、これは何事だろうと、何か間違ったところに来たのではないかと、花嫁衣装を着ながら思ったぐらいたったんですが、「わあ」と思ってびっくりしながら入場したという経験がございます。

そして、とんとんと進みまして、最後の御挨拶のところに行ったときに、私と主人がここに立っていました。それで私の父と母が立って、主人の父と母が立って、主人の父が最後の御挨拶ということでお話をしたときです。実は私、宮城県は名取市に住んでいます。この仙台市の隣が名取市でして、仙台空港があるのは名取市でございます。これは全国で言わせていただいているんですが、その名取市で有名な割烹料理屋の若女将に、割烹料理屋にお嫁に行くことになりました。

うちの父は、主人に「君に嫁にやるんだからね」とあのとき言ったはずですが、そのときに義理の父親は「うちにも頼もしい2代目ができまして、うちの店もこれで安泰です」と言ったら、皆さんがワーッと拍手して、ワーッとやってくれたときに、私と父と母は、そのことを聞いていないわけです。ですから、義父の顔を見て、父と母と私と3人が「えっ」と、こう見ているわけで、それが写真にしっかり写っているのです。

「えっ」と言っているのですけれども、皆さん盛り上がっているから破顔苦笑ですよ、「ううん…」となりながら、隣にいる主人に「聞いてない。全く聞いてない、私は。約束が違うよ」と言いつつ、顔は笑いながら言っていて、父と母は黙って目をつぶって前をにらむという、こういう映像があったぐらいですね。

私は、それでも、まさかそうなるとは思わなかったのですが、新婚旅行から帰ってまいりまして、洗濯とか掃除が大好きなので、洗濯物を干していました。そうしましたら電話が鳴り、昔は黒電話で、まだダイヤルでした。普通は留守番電話になるんですけども、まだその機能がなかったので、30回もずっと呼び続けているのです、外で干しているのに。何なんだろうと思って、慌てて洗濯物の途中で電話に出ましたら、うちの主人の母親で店の女将、割烹の大女将が「何やってるの。もうみんな6時から働いているのに」ということだったので、「今、洗濯物干しておりまして」と言ったら、「何が洗濯物の。すごく忙しいんだから早く来なさい」という電話だったのです。「えっ」と言ったら、「とにかくこっちはすごく忙しいんだから早く来て手伝ってちょうだい」と言われたので、有無を言わず洗濯物を途中で、私はとにかくお店まで車を走らせて行きましたけれども、その一声、鶴の一声じゃなくて大女将の一声で、私はそこのお店の若女将に就任が決まってしまったのです。

それで、ほかの仕事も全部やれなくなりました。若女将はいいんですけれども、若女将になるにはいっぱい条件がございました。従業員の3倍は働くこと、それからお米30キロが持てること、早くご飯が食べられること、いろいろあったのですが、この3つが一応大きな課題でございまして、一番の課題が、慌ててお店に行きましたら、入口から「は

い、そのお米持ってきて、今使うから」という言葉が第一声でした。30キロのお米一袋がここに並んで、それを1つ持ってこいということだったのですね。

私、今も体重が40キロないのですが、その頃は38キロぐらいで、30キロの米を持つというイメージがなかった。それでも「早く持ってきて、持ってきて」と当然のごとおっしゃるので、何とか持とうとするのですが、びくもしない、持ち上がらない。でも一生懸命、何とかこうやって引っ張りながらやろうとしましたけれども、持ち上がらなくて、そうしたら従業員の人がしびれを切らして走ってきて、ぽんと持ってわあっと行ってしまったのです。「済みません」と言いながら行ったら、「うちの嫁が米も持てないなんて」と、こう言われてしまってですね、これは米を持たないと嫁になれないんだ、そう思ったことが一つ。

それからというものの、1か月以上、休みのときにシミュレーションしたり、いろいろなことを駆使して、そして30キロの米を何とか持とうと努力しました。何しろ、昔から重たいものを持つのは、うちの家族では姉の役と決まっていました。がたいが結構私よりはいいのですね。それで重たいものだ、うちの姉が自然に持つことになっていて、私はこっちで「お姉ちゃん、すごい」と応援すればいいことに小さいときからなっていました。それが30キロの米を持つという大きなテーマがありまして、それを一生懸命、一生懸命努力しました。最後にできるようになったのはなぜかという、テレビで大女将たちが見ていたウェトリフティングです。小さな女の子が一生懸命重たいものを、体の何倍もあるものを持ち上げて、頭のてっぺんまで持ち上げる、あの子ができて何で私は腰につっかければいいのかにできないんだらう、そう思ったときに、その様子を見ながら私にもできるかもしれないと思って頑張って、人間頑張ればどこまでもできるものですね。やっと持てるようになったのが1か月半ほど後でしたね。

それから、御飯を食べるのがうちの職員がすごく早くて、従業員と一緒にうちはみんなで御飯を食べるのですが、私が朝顔茶碗1つ食べ終わるときに、うちの従業員は丼の御飯を2膳食べて、お茶も飲んで、お菓子も食べてデザートも食べて、もう仕事に移っていたり、自分のことをやっているのです。その間、そのさわさわしているところを、私は1膳の

御飯を食べるのに、ここにこう詰まりながら食べていて、そうすると大女将が、皆さん「オオカミ、オオカミ」と聞こえていますでしょう、「大女将」です。でもいつも、大女将が「うちの嫁、私のことオオカミって言うのよね」と言うと、「めっそもございませぬ。大女将でございます」といつも言うのですが、その大女将が、「あなたいいわよ。ゆっくり食べて」と言った後に、決していじわるではないんです、いじわるなのかな、いじわるではない、本音だと思うのですが、汚い話、放送禁止用語かもしれませんが、「早飯早くぞというの、仕事ができるかできないかを左右する。早く御飯が食べられない人は仕事ができないんだ」と言うものだから、でも私は仕事できていると、みんなの3倍早くしなきゃいけないと思って、一生懸命走り回りながらやっているから、それは違うんじゃないかなと思いつつ、でもその言葉がずきずきとくるわけですね。それでもお腹がすく。朝の6時から、ひどいときは4時ぐらいから夜の11時まで、ずっと働いているのです。みんなが休んでいる間も、私は足りないことをやったり、埋めたりしながら、一生懸命お嫁さんとして頑張っておりました。

それで、お腹がすく、本当にお腹がすくので、何とか食べたいのですが、それが食べられない。お腹がすくと仕事もあるから、「食べていいよ。ゆっくり食べて」と言ってくれるのです。言ってくれる裏側にとげがあるような気がするんです。もう性格が悪くなっていてですね。そのときに私、向かい側ですごいスピードで食べている一番早い人の顔、食べ方をずっと見ておりました。そうして、発見しました。なぜ早く御飯を食べられるか。私は父にいつも「えり子、よく御飯をかんて食べるんだよ」、「よくかむラットと」——ラットというのはネズミですね——「かまないラットよりかむラットのほうが頭がよくなるんだからね」と言われていたので、そういうものだと思っていましたが、じっと見ているとひと箸を大きく、ひとつまみを大きく、それからかまないで飲んでやればいいんです。早く食べるには、できるだけかむ回数を減らして飲んでやればいい、水とかお茶で飲んでやるということが、お腹の中に早く入れられるという方法だということを、そのときに編み出すことができて、それから私は、本当に早く食べられるようになりました。もう一つありま

した。喉が詰まるので、咽喉を広くする、歌を歌うときに「ハー」という、その広いままに流し込んでいけばいいということに気がきましたね。

それで、私は何とか合格点まではいかないけれども、だんだん認めていただけるようになりました。また、結婚してすぐに、ハネムーンベビーを授かりました。でも仕事はしていました。あるときに、妊娠して3、4か月目に、実は私、管理栄養士の免許を持っていて、調理教室の先生も少しやっていたりしたので、料理は得意です。ただ、ちょっと桁が違う。うちのお店は何百人というお客様を相手にするので、大きなコンロに大きな天ぷら鍋を3つぐらいガツとそろえて、油をバツといっぱいにして、そしてエビフライとか天ぷらなどをダーッと300個とか揚げていくのです。その役が私だったのですが、その油の臭いで「うっ」となったことがあったときに、うちの女将、もう鋭いんですよ、何気なく「つわりとかそういうのは、贅沢者のなるものだからね」と言われて、「大丈夫でございます」と言って、息を止めてそれをやったという記憶があります。そんなふうにして越えましたが、でも安産でした。妊婦はやはり余り大事にしないで普通にしていたほうがいいんだなと思っていました。

子どもが生まれて、大体産後21日というのが皆さん休まれますが、私はそういうのは余り適應されませんでした。まだ1か月にもならない子どもを連れて、お店で寝かせながら仕事をしていました。ただ、お店で仕事をしていますと、赤ちゃんが泣くとやはりお客様もいらっしゃいますし、みんなが気が落ちつかなくなるので、泣くととにかく走っていったおっぱいを飲ませる、泣くとおむつを替えるという状況だったのですが、そのおっぱいを飲ませ

るとき私は100%の母乳で育てたのですが、飲ませているとこっくん、こっくん、こっくんとおいしそうに飲むんですね。けれども、その後ろでは「はい、何して」「はい、かにして」「はい、何々持ってきて」とワーッといつも指示が聞こえているわけです。だから早く行かなきゃと、従業員の3倍働かなければいけないのに、さぼっている状況になっていますので、だから「早く！」と思って、本当に乳飲み子に早く飲んでほしくて、おっぱいを絞って飲ませると、むせて吐いてしまい、それからうちの息子は私のおっぱいからは、恐怖で飲んでくれなくなり、それで哺乳瓶におっぱいを絞って、そして寝ている息子の、赤ちゃんの手に哺乳瓶をくくりつけて、口に当てておく飲んで、哺乳瓶をポトッと落として寝ているという状況に、いい子だと思いながら、本当にそういうふうにして育てていました。

子どもは成長するにつけだんだん動き出します。動き出すと、今度はやはり危ないですからね、包丁だって何だって、こんな大きなスズキとかをぼんぼんさばくというような、そういう大きな包丁ばかりがあります。それから油だってちょっとかぶったら、もう本当に大変なことになる。そのため、できるだけ動かないように、動かないようにと、サークルをしたり、犬じゃないんですけども、本当に安全を保っていました。また、とにかくちょっと泣いたらすぐおんぶする。そのおんぶするときに、皆さんももし万が一のときに真似していただいていいと思いますが、でもお嫁さんとかに言うと、ちょっと虐待になるかな。おんぶ紐の頭のところには必ずこういう板がついていますね。板がついてるおんぶ紐ってありますね。その板のところに、うちの息子の頭を鉢巻きみたいに巻きつけて、それでおんぶをしながら「親子でサービスです」と言いながら、お客様に対峙する、そんな生活をしていました。

子どもが徐々に大きくなっても、できるだけそばに置いてあげたかったんですが、長男が3歳ちょっと前に2人目の子どもが生まれました。こうなると、もうお店に置いて、じっとさせておくなんていうのはもう無理です。一人では向き合うことができません。従業員も目いっぱい働いてくれています。女将もちろん働いて、みんな働いているのです。ですから、何をしても泣き止まない娘、そして息子もちょろちょろするということで、お店から車で5分



か10分ぐらいのところにある自宅に、3歳の息子とそれから0歳の娘を置いて、そこにちょちょこ行きながら仕事をしていました。

夜8時、店は午後4時半ぐらいから8時半、9時までが佳境です。8時になると、毎晩電話が来ました。息子でした。3歳の息子ですよ。「ママ、ママ、僕は一体どうしたらいいんだろう」という電話です。「どうしたの」と言ったら、娘はるり子といいます。「るり子がね、おむつを替えてもミルクをやっても、泣き止まないんだけど、僕はどうしたらいいんでしょうか」という電話をくれるのです。そうすると、もう心の中のぼろ雑巾をぎゅっと絞られるようで、子どものそばにすぐ飛んで行きたいのに、はい、あれして、これして、お客さん帰るよ、見送って、そういう言葉の狭間の中で、私は悲しいという思いよりも、とにかく元気でいくのが一番いい、もしここで「ごめんね」と言ったら、向こうも悲しい、私も悲しい。でも、お店をやっているんだから仕方がない。なので、こう言っていました。息子は忠将（ただすけ）といいます。「忠将、全然オッケーよ。隣の木村さん家に行きなさい」と言っていました。私の家の前の木村さんという方は、「坊や、奥さん」と言って、「いつでも面倒見てあげるから言ってね」とおっしゃってくださっていた優しい方でした。本当に隣の方に恵まれて、私は幸せだったと思います、お言葉に甘えて息子にそう言いました。そうしたら、息子が「うん」と言って、それから木村さんのところに行ったみたいで、帰るともうちゃんと寝かしつけてありました。

それからしばらく電話が来なくなってよかったなと思っていたら、今度はまた電話が来て、「ママ、僕はどうしたらいいんだ」「今度は何、けがでもしたの。木村さんのところ行けばいいじゃない。木村さん、見てくれるから木村さんのところへ行って！お母さん今は行けないから。」と、「そうじゃないんだ。今日は木村さんがいないんだよ」という状況。「そう。だったら反対側の魚住さんのところに行きなさい」。魚住さんもそういう方でした。ちょうどお二人とも専業主婦で、よく行き来をしてくださっていたので、本当に面倒を見ていただいて、私の子育ては本当に木村さんと魚住さんがいてくれなかったら、どんなことになっていたか。それこそ虐待どころではないところで、今頃こんなところに立って

いられなかったかもしれない、そんな子育てをしていました。

でも、息子が小学校1年生になったときに、私、どうしてもしたいことがありました。私も子どもの頃は家族が共稼ぎで鍵っ子でした。小学校からランドセルを背負って、隣のスグルちゃんと一緒に帰っていたのですが、私が家に入って「ただいま」と言うと、広い暗い家の中から、猫が「ニャーン」と出てきてくれる、それが私の「おかえり」でした。でも、隣のスグルちゃん家は「ただいま」と言うと「おかえり。今日は学校どうだったの。手洗っておいで。おやつあるよ」というお母さんの声が聞こえるのです。それがすごく子ども心にうらやましくて、「いいな」と思うのですけれども、それを親に言ったらいけないと子ども心にずっと思っていました。

そして、私が結婚して子どもができれば、子どもが学校から帰ってきたら、「おかえり」と言えるお母さんになる。それが私の子どもの頃からの願いでした。それなのに3歳の息子と0歳の娘を置いてそうやって仕事をしている自分が本当に許せないそんな心中で、ランドセルを背負ったかわいい息子を見たときに、大女将にお願いしました。「私、いつもより早く参ります。それでみんなが休んでいる時間、お昼休みから少しの間、その間の仕込みを全部ちゃんとやります。ですから、その時間だけ少しお家に帰していただいていいですか。息子に「おかえり」と言ってあげたいんです」と大女将にお願いしました。実は大女将は、もう孫のことがかわいくてしょうがないのです。ですから、目に入れても痛くないような状況になっておりますので、「そうだね、うん、そうだそうだ」と。「忙しいときは駄目だけど、普段のときはいいよね」と従業員にも言ってくれ、従業員は「私たちは行けないのに、どうして」という気持ちはあったかもしれませんが、「うん、いいよ」と言ってくれたので、小学校入学式の次の日から、私は家にその時間だけ帰してもらうことができました。

息子が、入学式の次の日に学校から帰ってくるとき、もう本当に泣きそうでしたね。小学校から帰ってきて、そのときに覚えてたの校歌を下手くそな声で、大きな声で道路を歌いながら帰ってくるのです。それで玄関に入ってくると「ただいま」と言いました。誰もいないはずの家に、この子はこうやって帰っ

てくるのかと思ったら、胸が潰れそうになりました。でも、今日は違う、と思って、おやつを、マルマルドーナツという得意なやつを作って、「おかえり。ほら、ドーナツ作ってるから手を洗っておいで」と言ったら、うちの息子が何と言ったと思いますか。「えっ、お母さん、どうしたの。おばあちゃんにしかられたの」って言うのです。「違うよ。おばあちゃんがね、行っていいよって言うてくれたのよ」と言って、それから手を洗って、「うん」と大喜びで、もう本当にあのときのうれしさは言葉には言い表すことができないほど嬉しかったです。

おやつをたくさん作り過ぎたので、こんなに食べられないよと言うものですから、「じゃあお友達を連れてきていいよ」と言ったら、「いいの」と言うから、「いいよ。明日もいっぱい作っておいてあげるから、明日連れておいで。明日お母さん大丈夫だからね」と言ったら、次の日、大喜びで5人の友達を連れてきてくれました。5人ですよ。ケーキを3台も作ってしまって、「あれ、5人なの」となりました。うちは100人とか200人のお客さんが相手だから、ちょっと感覚がおかしくなっていて、「5人なんだ」と言ったら「えっ、もっといいの」「いいよ。いっぱい連れてきて」と言ったら、2週間後には25人。冗談ではなく。クラスが26人だったので、隣のクラスからも来ていたのですが、大体1クラスが移動しているような状況でした。

子どもたちは家中をかけずり回って、泥だらけにされるのですが、それがものすごく心地よかったです。これで、今までの子どもたちに対して何か引っかかっていたものが、少しは許されるのではないかな、そんなふうに思いながら、本当におやつを作る手が弾みました。

でも、子どもたちが二十何人集まると、必ずグループに分かれます。その中で、いつも、1人だけ私のそばから動かないで、じっと私の動向をずっと見ている子がいました。何にもしゃべらずに、そこに座って私を見ていた。だから「手伝ってくれる」と言って手伝いをしてもらった。うれしそうに手伝ってくれていました。準備も一生懸命手伝ってくれていました。この子しゃべれないのかしら、何も言わないから、そう思いました。そうしたら、やっと1か月以上たってから一言言った言葉が、「おばちゃんいいな」だったんです。「えっ、お母さんいるでしょう」

と言ったら、「うん。おばちゃんいいな。忠将のおばちゃんいいな。俺、おばちゃんだったらよかったな」と。こう言った言葉がとても印象に残っていました。「何で」と聞いたら、「俺の母ちゃん、朝から晩まで誰かの名前を言いながらベランダで豆腐に針を刺してるんだ。だから、御飯はずっと食べてないんだ。でも、今日は給食3回おかわりしたんだ。それからこれ」、パンパンになったポケットからパンの固まりを3つ出してきた。ほろほろと。「ほら」って。「どうしたの」と聞くと「これ、妹の分。みんなからもらったんだ。妹も食べてないから。給食ないし。来年にならないと小学生にならないんだ」、そんなふうにあっけらかんと言うその子の状況をその時の私はよく分かりませんでした。

よく聞いてみると、お母さんが心の病、お父さんがいない、そしてその子と妹と3人で暮らしている。民生委員さんや保健師さんたちが何度もお家に行ってお母さんを病院に連れていこうとするのですが、絶対に鍵を開けてくれない。何とか病院に連れて行ってあげたい、そして家に来ているその子が鍵を持っているから、鍵を開けてもらいたいということだったので一緒にその子の家へ行ったことがあります。その時、私は初めて、こんな家があるということを知りました。もうドアを開けた途端にごみの山。ごみの山のところに新しいランドセルと帽子がある。そんなところでした。お母さんは、そのごみの山の奥の入口から真逆のところにあるベランダで、やはり座っていました。これじゃ御飯なんか作れるわけがない。こうして生活しているということを知り初めて目の当たりにしました。

それからうちでは、うちの息子たちとその子たちの御飯と、お母さんのお弁当とおにぎりを作って毎日渡しました。

あるとき、やっと明るく笑うようになったその子が、いつもここにいるはずの子がいなかった。どうしたのかなと思ったら、ちょうど遊びに来ていたお友達の1人が誕生日で、ゲームを買ってもらった。でも持って出られないから「お家だったらいいよ」と言われて、うちの息子がどうしても行きたくて、1人で行くのが嫌だからということで、その子を誘って3人で、そのお友達の家に行った。そうしたら、5分もしないうちにその3人と、行ったお家のお母様と、年中さんの弟の5人が戻ってきました。

戻ってきたというか、家の玄関にきました。「お邪魔します。お邪魔します」とこういう感じでしたので、「はい」と出ていきました。そうしたら、そのお母さんの顔は本当に怖かったです。「おたくで、こんなに子どもたちを集めてますけど、泥棒でも飼ってるんですか」と、こういう言い方でしたので、「えっ、うちに来る子はみんなうちの子で、ルールは守る、約束は守る、とても優しいいい子たちです、泥棒とか何とか、どういうことでしょうか」と言ったら、「そうですか。でもね、この子、うちの年中さんの子の大事にしていたおもちゃを盗ったんですよ」と言って背中を押されたのが、いつも私の傍にいたその子でした。私は、あの家の環境も考えて、おもちゃが欲しかったのだなと、すっと思いました。

でも、「いや、この子はそんなことは絶対いたしません。する子ではありません。一番いい子なんだから」と一応言ったのです。一応って本当にそう思って言いました。そうしたら、「奥さんがそう言うと思ってですね、この子の家に行ってきましたよ。そうしたら、ありました。これが玄関に」。そうしたら、うちの息子がほろほろ泣きだして、それで「本当にあったの、忠将」と言ったら、「あった」と答えました。ばらばらになっていた子どもたちは烏合の衆のように集まってきて、「ね、ほら、間違いないでしょう」と奥さんが言ったので、「ああ、そうですか。申し訳ありません。」そう言いつつ、彼に「じゃあ謝ろう、謝ろう。とにかく謝ればいいんだから」と、一生懸命謝ることを促しましたが、その子はぐっと口を真一文字にして、絶対に謝ってくれなかった。「おばちゃんも謝るから、ね、謝ればそれで終わるからね」と言っても、その子はぐっとなったまま全然身じろぎもしない。もう私は、本当に憤懣やる方なかったです。一言謝ってくれたら、それだけでよかったのに、何で言ってくれなのんだろう。「一緒に言うんだ、言ってあげる」と言っているのに、と思いながら、「ほら、ほら」と言っても絶対に言わない。そのうち子どもたちが集まってきて「ほら、謝れ。盗ったのか。何だ、謝らなきゃ駄目だ」と、口々にわあわあわあわあ、そこに今度は相手のお母さんが「ほら、盗人猛々しいとはこういうことを言うんですよ!」、あちこちからわあわあわあわあと…。

それで、頭がかったなってしまった私は「分かった。謝れないんだね。それはうちの約束と違うよね。

だから、うちの約束を、みんなのルールを守れないという子はうちの子じゃないから、君は帰りなさい」と言っても、その子は帰らなかった。でも、「とにかく君がいるとみんなが悪く言われるんだから、帰りなさい」と言っても帰らない。もうかっかとなりまして、「君がいると迷惑なの。だから帰ってくれ」と言って、微動だにしないその小学校1年生の子の背中を押して、私は外に出してやりました。すっきりしましたよ。あんなにやってあげたのに、こんなに誰よりもやってあげたのに、何よ、恥をかかせてと、本当にそう思っていました。とんでもない子だわと本当に思いました。彼を追い出してから、平身低頭に、そのお子さんと弟ちゃんとお母さんには謝ってお帰りいただきました。それからもうむかむかきまして、「その子は絶対に家へ入れない!」と強く思っていました。

それからその子は来なくなって、もう本当に幸せでした。ですが、実は、その子はその後も毎日うちの門の前まで来ていたということが分かりました。我が家の二階に息子の部屋があって、その部屋のベランダに布団を干していました。その下が門でした。布団を入れにベランダのところに行ったら、門のところでピンポンを押そうとしていたその子がいて、もう早く帰ってほしくて、早く帰ってほしくて、「もう何なの、また来て!」と思いました。本当に盗人猛々しいなんてこちらが言われて恥をかかされてるんだからね、などと思いながらも、じっと彼を隠れて見ていました。5分ぐらいこうやっていて、それからいなくなったので、ああよかったと思って布団を入れました。その後、次の布団を入れにいったら、また戻ってきているで、もうやめてほしいなと思って、彼が帰るのを隠れつつ覗いていました。心中は絶対許さないと、そう思っていました。

その母親の様子を逆側の部屋のドアのところで息子が見ていて、そして、つかつかと私のところに来て、「お母さん、お母さん、どうしてあの子のこと許してあげられないの。あの子はお母さんのところに来たくて、毎日毎日毎日、あれからずっとうちの門のところまで来てるんだよ。あんなにお母さんのところに来たいと思って、一生懸命通ってるのに許してあげないなんて、かわいそうじゃないか」と、大きな目から涙をほろほろ流して言われたときに、さあっと体の血が引いたのです。

慌てました。それはそうです、私は彼のあの家庭環境を分かっていた。そして彼は私を慕い、一生懸命手伝っては、おばちゃん、おばちゃんと言っていた。その光景がざあっと一気に押し寄せて、慌ててその子のところに行って抱き締めたときに、その子はこう言いました。「おばちゃん、ごめんなさい。俺はもうあんなことしないから、もう一度おばちゃん家の子どもにしてください」と言われたときの、その声が今でも忘れられなくて…。そしてその時、その子を抱き締めて「ごめんね、おばちゃんが悪かったから」と言いながら、家に2人で入ったときに、我が家は門から家までは2メートルぐらいあるのです。その途中で彼が立ち止まったので、「どうしたの？ みんなに何かあるの」と言ったら、彼が「おばちゃん、でもね、俺ね、あれね、あの子がくれるって。ちょうだいって言ったらくれるって言ったんだよ。だから俺は、あれはもらったんだもん。盗ったんじゃないよ。もらったんだもん」と言いました。

この一言で、私は自分の罪の大きさを実感しました。なぜあのときに「どうしたの」と一言聞いてあげられなかったのか。一言の弁明の余地も与えず「いや、この子はそんなことありません」、その後今度は「謝りなさい」、そして「出ていきなさい」。こんなひどいおばさんを、まだあの子は慕ってくれていると思うと、胸が張り裂けそうになりました。

その子のことは、それからうんとえこひいきをしました。授業参観も、息子の隣のクラスでしたが、まずはその子のクラスに行ってから息子のクラスに行くぐらい、えこひいきをしようということにして、自分の、彼の心の傷を埋めようと思いました。

でも、小学校2年生になったときに、彼は妹ちゃんが1年生になり、民生委員の方に学校の道具を全部そろえてもらったのですが、消しゴムだけ忘れていた。だからお兄ちゃんの消しゴムを半分にして渡したら、妹がどうしても新しい消しゴムが欲しいと言って泣いた。お母さんはまだ対応しきれない。なので、消しゴム、消しゴムと泣く妹が泣き疲れて寝てしまったものの、次の朝に、100円玉がテーブルにあったのを妹ちゃんが見つけて、「お兄ちゃん、お金あったから消しゴム買えるよ！ 買いにいこう！」と、大喜びで買いに行ったのですが、ちょうどその日の朝は日曜日でした。前の日の土曜日は給食がありません。金曜日からちょうどうちのお店に

は要人がいらして、家族で接待していました。家に帰れないので、お弁当も3日分用意していました。でも、誰もいないからということで、彼は家に入ることが出来ず、それには手をつけられずにいたのでしょう。つまり二日も食べる事が出来なかった。金曜日の夜から土曜日まで丸々食べられない。日曜日の朝に100円玉を持ってお店に行ったら、目の前にカップラーメンが99円で売っていたので、それを買ってしまった。1円しか残ってない。

妹に「お腹へったろ、これ一緒に食べような」と言ったら、妹が「消しゴム」とお店の前で泣き出した。困り果てた彼はしょうがないからポケットに消しゴムを入れた。それがカメラに映っていた。お母さんには対応できないからということで、私が学校に呼ばれました。

「どうもすみませんでした」と謝りつつも、「大丈夫。こんなの幾つでも買ってやるから気にすることない。」と言いながら、事情を話し、私が悪かったのですと謝った。

けれども、あの時の記憶がよみがえったのかもしれませんが、その子はその日からピタッとうちに来なくなりました。

中学生になって、うちの息子は違う私立中学校に行った。でも、その子は通学にはうちの前を必ず通ってくれた。だから、朝仕事に行って、帰ってきて御飯を子どもたちに食べさせて弁当を作って、そして送り出してやって、洗濯をして、洗濯を干すときに、必ずその子が通るような時間に行くようにして「おはよう。行ってらっしゃい」と2階のベランダからずっと声掛けをしました。

最初の頃、にこにこして「行ってきます」と言っていたその子は、1か月もしないうちにボンタン、短ランになって、髪の毛の色は変わり、ピアスは耳だけじゃなくて鼻とかいろいろなところでき、その後には今度は特攻服になり、通るたびに顔色が悪くなって、かなりの距離があるのにシンナーの臭いがしてくる。その姿を見るたびに、私は、「もう一度あの子の笑顔が見たい。こうしてしまったのは私だ。あのときにちゃんと対応していれば」とずっと思い続けていました。彼が変わって行く姿を見るたびに、見るたびに、毎朝憂鬱でした。そして、もう一度、もう一度、あの子が「おばちゃん」と言った、あのかわいらしい笑顔を見なかったら、私はこのま

ますくなり死んではいけないと思うほど自分を責めていました。

そのときに「あなた、保護司やってみない？」という、地区の保護司の会長さんからの誘いをいただいたのです。私はそのときに初めて、43歳で、保護司という存在を知りました。

そして、やっとこれであの子の笑顔に会えるかもしれない。あの時の償いができるかもしれない。その一念で、私は保護司という仕事の委嘱を受けることに決めました。

しかし、決めるに際し心配がありました。それは当時、うちの子どもたちは中学校2年生と小学校6年生。まずは子どもたちに何かがあったら困るなと思ったのですが、子どもたちにはいつでも、何を言われても、とにかく私は相談することにしていましたので、「こういうお話あるんだけど、どうかな」と話したところ、子どもたちが「あの子のこと変えてあげられるのはお母さんだけだと思うよ。だってあの子、お母さんのこと大好きだったもの」そう言って応援してくれました。そうです、いつも最後の背中の一押しはうちの子どもたちがしてくれた。そんな子どもたちに囲まれて、私は幸せな母親だし、保護司の委嘱を受けることができたのでした。

それが2001年11月です。委嘱後の12月に、少年院の参観に行きました。昔は見学と言いましたが、今は参観と言います。少年院の中は暗くて、殺風景で、心まで寒いなという感じがしました。たくさんの鍵束から鍵を1つ見つけて鉄のドアを開け、また中に入ると鍵を閉め、狭い子どもたちの部屋は整理整頓ができていて、その中に若い子どもたちのむせ返るようなにおいが充満している。見せていただいたときに、私は余りにもきれいな整理整頓、それと相まっての若い男の子たちの充満する匂いのギャップから何とかそこから逃れたいと思いました。閉塞感にいたたまれず、何だかもうここにいられない、子どもたちの少年院のその部屋にはいられないという感情に襲われて、しかし、逃げようにも鍵がかかっているのです、逃げられなくて、それで窓辺のところに行って、そして鉄格子のかかる、その窓から広がる空を見て、はあはあとうとう息をしていました。そうしたら、一緒に同行してくださった教官の先生が「先生もそうですか」と言うのです。「えっ」と言ったら、「あの子たちは、朝からずっとカリキュ



ラムをこなしているんですけど、業間って間がありますよね。その業間に、あの子たち替わりばんこにここに来て空を見てるんですよ」と。「何ですか。私は息が苦しいから来てるんだけど」と言ったら、ここにいる子どもたちの、当時は2001年ですから18年前ですね、その頃は、子どもたちの7割以上が、家族や里親、そのほかの人たちからの虐待の経験者です、ということでした。私は、ここで初めて虐待というのが目の前に来たのです。それまでは虐待という言葉は動物やその範囲と思っていましたし、私の世界に虐待という言葉は存在しませんでした。しかし、7割強の子どもたちは虐待の体験者です。あとの2割強は家庭崩壊です。とんでもない家族がいっぱいいるのです。あと2%か3%ぐらいが過保護とかそういう感じの子どもたちです。

と話すこの言葉に、私はカルチャーショックを受けました。私は、そのような子どもたちがこの世の中にいるなんて、それまで全く知りませんでした。次いで、教官が「でもね先生、あの子たち、今ここで頑張っている子どもたちは楽しみがないと思いますよ。苦しいと思います。でも唯一の楽しみは何だと思いますか」と尋ねたので「分からない」と言ったら、「家族とか面会者が来てくれることですよ。家族が来てくれる、虐待を受けても劣悪な環境に置かれても、何をされても、家族が来てくれることが、あの子たちの一番の楽しみなんです。だから、毎月毎月、家族に手紙を書いたりしているんですよ」ということでした。でも、その頃は4割強の子どもたちの家族は面会にも来てくれない、手紙もくれないような家族なのです。だから、あの子たちは、その中で、「俺らは社会のごみで、カスで、要らねえ人

間で、生まれてこなければよかったんだ。だからこんなところに隔離されてるんだ」と思っている。だけど、家族がいれば、そう思わせてしまった家族を思って窓辺に行って、来てくれない家族と閉鎖された少年院にいる自分とをつなぐツールが、鉄格子のある窓の外に広がる空なんだ、ということを知ったときに、そうやって子どもたちは家族への思いを馳せているんだと聞いたときに、もう胸がいっぱいで、泣くのを我慢するのが精一杯でした。

折も折、1人の少年が向こうのほうから歩いてきました。きちっとした作業服を来て、丸々くるくる坊主で、そして気をつけをして「こんにちは」と私の目をまっすぐ見て言ったときの、その目がものすごく透き通っていて、「えっ、何でこの子ここに居るんだろう。うちの息子とほとんど変わらない」と思いました。変声期前の「こんにちは」がうちの息子の声とかぶったんです。そして、その状況が把握できなくなり、「何でだろう」と、本当に何が何だか分からなかった。でも、気をつけをしてじっと私の目を見るその目がすごく澄んでいて、その時私の息子が5歳のときを思い出しました。うちの息子も寂しいとかお母さんがこうだから嫌だと言ったことがなかったのですが、5歳のときに一度だけ言ったことがあって、今でも忘れられないのですけれども、ある朝、起きてカーテンを開けて、「ほら、朝だよ」と言ったら、息子が「今日お母さんいたの」「うん、今日はね、お仕事午後からだから大丈夫だよ」と言った時のこと、「そうなんだ。僕はね、お母さんは一生懸命働いて偉いと思うよ。だけど、朝起きたときにお母さんがいないのが僕は一番寂しいんだ」と言ったことがあったのです。そのときに、私に向けたうちの子どもの目と、その少年の目がすごく重なって、この子に何がしてあげられるのだろう、何をしてほしいのだろう、どうしてこんなに透き通ったきれいな悲しい目をして私を見つめているのだろうと、ずっとその子を見ていました。

そうしたら、その子がだんだんもじもじとし始めて、困っている様子に気づき、「ありがとう。挨拶してくれてありがとうね」と言ったら、ニコッと笑ってお辞儀をしてさっといなくなった。そのときに、彼の腕に大きなケロイドの痕が、白い肌に赤い大きなケロイドの痕があるのが見えて、もう胸がいっぱいになっていたのだけれども、「ああいうふうには可

愛くは見えるけれども、少年院に来るくらいだから、喧嘩とかしてなかなかやる子なんですよ」なんて、苦しい胸を振り払おうと、教官の方に言ったら、またその教官がそこでこんなことを言うんです。

「あの子はとんでもない虐待に遭ってたんですよ。生まれてすぐにお母さんがいなくなって、お父さんが育てていたんだけど、お父さんはアル中で、2歳のときに、あの子が言うことを聞かなかったか泣いたか分からないですが、うるさかったんでしょ、2階のベランダから下の植え込みに落っことしたらいいんですよ、要らないからって。「おまえなんか要らない」とかって言って、ぱっと落っことしたらしくて、そのときについた傷が、本当はお医者さんに行って縫合していれば治っていたんだろけれども、ぱっくり開いたままの傷をそのまま治さなかったから、ああいうふうにはケロイドになってしまったんですよ」と言われたときに、傷の痛みよりも、どれだけこの子の心が痛んだんだろう、お母さん、お母さんと泣いたのではないのかなと思ったら、胸がいっぱいになりました。

そして、ここにいる子どもたちの多くがそのような経験をしていて、プラス「120%の子どもたちがいじめに遭っています」。そう話す教官の言葉が私の脳裏をぐるぐる回りました。生まれてこの方、笑ったことがない子どもたち、その子どもたちがこんなにいる、そう思っただけで体が震えました。彼らは幼いなりに生き延びるために頑張ってきたのだ、そう思うと胸が張り裂けそうになりました。時は12月、クリスマスです。街はクリスマスカラーでとてもきれいです。それに相まった少年院の殺風景さ、子どもたちの悲しさ、状況、全てが私の中に大きくのしかかりました。

その後、たくさん子どもたちが作業所で作業しているところに行きました。みんないい子たちに見えた。みんなかわいく見えた。どうして笑うことができないのだろう、こんないい子たちが。そう思った。そしてこの子たちのクリスマスに幸せなときがあったのかな、そう思いました。そして、思い立ったのです。

ちょうど私は、そのときにエフエムいわぬまで2本の番組を持っていました。DJのパーソナリティーをしていました。その日、参観から帰ってお店が終わってからの収録でした。クリスマスバージョンと

ニューイヤーバージョンを収録したときに、ラリー・ホワイトのアメイジング・グレイスを聞きながら、今日のことを思い出しました。そして、そうだ、あの子たちに物をあげる、それは無理かもしれない。だけど、心を音楽に重ねてあげることはできる。少年院では、好きなラジオやテレビや音楽が聴けないと聞いた。だったら、あの子たちが聴きたい曲にメッセージを添えてプレゼントできたら、心が少しはあったかくなってくれるのではないかな。君たちは一人じゃないよ。社会に出てくるのが怖いなんて言っていないでいいんだよ。ちゃんと社会で君たちを受け入れる、そう思っている人はいるんだよ。君たちを愛する人は必ずいるから。あの子たちにそんな思いを伝えたい、そう思い、少年院の協力をいただき、2001年12月24日、初めて少年院にラジオが流れました。子どもたちからのリクエストを取ってもらい、これはどうですかというような相談や、子どもたちの手紙なども来て、その中からチョイスした曲をかけ、メッセージを重ねてクリスマスプレゼントとして贈ったのがDJの始まりです。それから18年にわたりまして、3つの少年院に向けて1か月に1回、1時間のラジオを制作し贈り続けているのです。

そのラジオを贈り続けて、5年、10年、15年と、節目節目に、私は5周年、10周年、15周年にいろいろなイベントをしました。5年目にはシンガーソングライターの坂本サトルさんに「私たちのWe Are The World」という歌い出しで曲を書いていただいて、7人のアーティストと100人の有志で一緒に作ろうよと呼びかけ、コーラスに参加いただきCDを作りました。10年目は松本哲也君、そして一昨年の15年目には「会いたい」の沢田知可子さんや、「かぐや姫」メンバーの正やんとか、「オフコース」の鈴木さんとか、そういう方々が入ってくださって曲を作り、メッセージを乗せて全国の少年院と少年刑務所に向けて15周年記念、「クリスマスの優しさの贈り物」として全国に贈らせていただきました。

その5年目の放送を聞いた少年から、こんな手紙が来たのです。

拝啓、Rosyさん、「カントリーボーイ」の皆さん、そしてリクエストラジオの制作に携わっている皆さん、いつも楽しい番組をありがとうございます。私は、リクエストラジオの音楽を楽しみにしていたととも

に、Rosyさんや「カントリーボーイ」の皆さんのいつも明るい声と楽しいトークも楽しみにしていました。私は、第1回、第2回目の放送では、ただ音楽が聞けてラッキーだなとか、特に何の感情もなく音楽だけが楽しみという感じでした。

しかし、第3回目の放送、クリスマスバージョンの2時間の放送を聞いて、私は感動を覚えました。Rosyさんたちは、どうしてここまでしてくれるのだろうという、そんな気持ちを抱きました。最後には、私の名前も含め院生全員の名前を呼んでいたで、それにRosyさんと「カントリーボーイ」の皆さんの歌が、本当に私の心を揺さぶりました。今まで、自分は孤独だと、一人で生きてきて、応援してくれる人、支えてくれる人などいないと思って生きてきました。けれど、クリスマスバージョンの放送で私は感動を覚えたのとともに、人は支え合いながら生きているのだと思えました。

私は、Rosyさんや「カントリーボーイ」の皆さんに心から感謝しています。リクエストラジオをきっかけに、私は夢を持つことができたのです。私はRosyさんたちのように、少年院の院生に語りかけることはできませんが、少年院に入らないようにさせようと思いました。そのために、私は教師になろうと思いました。今まで暴力団の組長などにしか興味がなかった私に、希望の光が見えた瞬間でした。それもこれも、このリクエストラジオの放送のおかげ、Rosyさん、「カントリーボーイ」の皆さん、少年院の先生方の皆さんのおかげだと思っています。本当にありがとうございます。

3月の放送が最後になる可能性があるというのは、何だかうれしいような悲しいような妙な気分です。3月の放送で最後になるかもしれませんが、私のように希望の光が見つけれられるように、これからも院生のみんなにRosyさん、「カントリーボーイ」の皆さん——「カントリーボーイ」というのは番組名です。DJスタッフです——の皆さんの明るい声とトーク、そして音楽を聞かせてください。これから、何年後、何十年後になるか分かりませんが、立派に更生し、教師という仕事をして落ち着いて話せるようになったら、Rosyさんたちに会いにいきたいというのが最終的な私の夢です。その夢がかなうまで、元気でいてください。そして、そのときに私の口から直接言わせてください。「ありがとうございます

いました」と。

こういう手紙でした。私は、この手紙が来たときに、そんなこと誰も信じないだろうなと思いましたし、ほか人たちは、「こう思ってもらえるだけでもね、現実的にならなくても」と言ったのですが、私はラジオを通して、手紙を読み、そして「必ず君のことを信じて待っているよ。世界中の誰が信じなくても、私だけは信じてるからね」、そんなメッセージを送りました。

しかし、手紙、リクエストカードは自筆にしてもらっていたのですが、この手紙が来たのが1月で、3月で仮退院ということで彼は少年院から出られるということだったのですが、この同じ文字でずっと、それから1年以上リクエストカードが来て、おかしいな、おかしいなと思っていました。

そこで初めて私が知ったのは、少年はあくまでも保護ですから、少年院というところは確固たる引受人や引受先がないと、社会に出ることができないということを知りました。彼は、天涯孤独でした。紙袋に入れて捨てられ、施設で育ち、施設ではとてもよい子で、中学校を卒業して、本当は高校も行けるほど頭がよかったのに、入っていたグループホームのような施設が、貧乏だからということで、彼はその施設を助けようと、高校進学をあきらめ、就職を選択し、大工さんの棟梁のところに弟子入りということで寮に入りました。彼は頭もよく、性格もいいので、棟梁からとてもかわいがられるので、同じ寮に住む、前からいた3人の先輩からパシリにされたり、夜はおもしろくないとボコボコにされていたそうです。

あるとき、棟梁から「日光東照宮の宮大工の見習いがあるから、おまえだったらできるから行ってこないか」と言われたその日の夜、焼きもちを焼いた同寮の先輩たちから、死にそうなほど暴力を受けた彼は、隙を見て、着の身着のまま、11月23日の寒空に、短パン半袖で裸足で逃げ出した。もうどこにも行けない。三日三晩御飯も食べてない。寝る場所もない。寒い。もう死ぬんだなと思ったときに声を掛けてくれた人がいた。「おい、飯食わないか」と。嬉しかった。ご馳走になったカツ丼がとてもおいしかった。屋根のあるところで毛布にくるまって寝かせてもらったときには神様だと思った。だけど次の日になったら、「ほら、出かけるぞ。これ着ろ」と洋服をもらった。着た途端に始まったのが非行や犯

罪だった。自分がしたくなくてもさせられ、それをせずにはいられなかった。3回も少年院に入った。「何だよ、いいことばかり言ってくせに、結局こうかよ。俺は絶対にこの少年院出たら暴力団の組長になって、あいつらの鼻をあかしてやるんだ。」そう思うのが彼の生きが이었다。

しかし、たった1回、クリスマスバージョンのときにその子の名前を、「クリスマスおめでとう。メリークリスマス、お母さんの代わりだよ」と言って、たった1回呼んだその私の声、彼の名前を呼んだその声によって、彼はこうして、暴力団の組長ではなくて、学校の先生になろうと決めた。たったそれだけなのです。生まれてこの方抱かれたこともない、おっぱいをもらえたこともない、名前さえつけてもらっていない、そのお母さんの声と私の声を重ねて、彼は学校の先生になることを決めたのです。しかし、引受先がなくて1年以上少年院を出られなかった。当時、少年を受け入れられる更生保護施設は、日本中で4つしかありませんでした。そして、日本中には53の少年院が当時ありました。そこに5人から10人の子どもたちが、行き場のない子どもたちが施設の空きを待っているということを、後で知ることになりました。

そこで私は思ったのです。そうか、この子が私のところに帰ってきたときに「お帰り。ここは君の家だよ。君が帰ってくる家を作って待っていたよ。だから何かあったらいつでも帰っておいで」。そんな家を建てたいと思いました。その私の想いを受けた仲間、志を共にした仲間たちと共にNPO法人ローゼンベルを10年前に立ち上げ、8年前にハウスをオープンし、今まで48人の子どもたちを迎えました。行き場のない、家族もない、虐待を受け続けた、120%の虐待です。彼らの洋服を脱いだ姿を見ると、目を背けないではいられないような虐待による傷がある子どもたちばかりが私のハウスには来ます。

なぜ虐待するのでしょうか。なぜ虐待を受けるのでしょうか。あの子たちはこう言っていました。「俺、小学校のときはいくらかかっていったって負けるんですよ。でも何が何だか分からなくて、ただぶっ叩かれて、蹴っ飛ばされて、そしてお湯掛けられたり、バーナーで焼かれたり、飯食わせてもらえなかったり、俺、何悪いことしたの。何でこうなの。ずっとそう思っていましたね。でもだんだん中学校になって、

力がついてきたんで、タイマン張れるようになったんで、最近は親父のほうの方が怖がってるんですよ。偉そうに言って、でもお金ももらえない、虐待は変わらない。だから非行に走ってしまう」と。

ハウスに来たある子どもは、虐待されてもう今日は殺されるかもしれない、このままだったら死んでしまうかもしれない、そう思って、県外から県をまたいでまた違う県まで行くと、自転車をノンストップで走らせて、やっとこさ逃げたはいいものの、お腹がすいてしかたがない。店員にお願いして捨てるお弁当を貰おうとしたけど、断られ、駄目だったから、賞味期限、時間が書いてあります、捨てるその3分前になったら、一番多く残っているお弁当を3日に1回、3回盗ったところで捕まったのです。

ある時、私はその子に言ったのです。「日本は、悪いことしたら捕まることになっているんだから、どうせだったら同じ弁当ばかり盗っていないで、今日はこれ、今日はこれとやって、これはうまかった、これはうまくなかったとそんな生産性のある盗り方をしたらよかったんじゃないの」と冗談で言いました。子どもたちはうちのハウスに来ると、みんなとにかく笑うことから始まりますから、ワハワハ笑いながら、「こんなにいいところに、俺、来れてよかった」と言いながら、一生懸命前に向かおうとしていて、心の傷もそろそろ癒えてきたかなと思って、そんな冗談を言ってみたら彼は急に真顔になってこう言いました。

「えり子さんには俺の気持ちなんか分かんねえっすよ。いつ殺されるか、どれだけ痛みに耐えるか、恐怖と絶望、それが俺のこれまでだった。そしてその環境から逃げ出してきた、ほっとしたと思ったら、今度は弁当盗って、いつ捕まるか、いつ捕まるかってびくびくして、俺はちゃんと悪いことだって分かっている、そう思いながら弁当盗るんすよ。喉から心臓が出るようにドキドキしながら盗るのに、味なんか分かるわけじゃないじゃないすか。えりさんになんて、俺の気持ちなんか絶対分かんないっす。」そう言われたときに、「そうだな」って、「悪いこと言っちゃったな」って、知ってるのに、軽率だったって、彼の顔を見てほんとに反省しました。そして、これが虐待の現実で、非行しなければ、この子たちは生きてこられなかったのだと、そう実感しました。

虐待というものが生む副産物は、いいものが一つ

もない。家族を含め、本人もそうです。そして周りの人たちが、私は一番責任があると思っています。皆さんは、こういう仕事をされているので、興味もお持ちですし、意識付けとして今日は来ていただいたと思いますけれども、近所の方がたは、もし虐待を受けていたり、異常に痩せていたり、暗い顔をしている子どもが近所にいても、どうして声を掛けてあげることができないのだろう。「おはよう」と言えいいだけなのに。「おかえり」と言ってあげればいいだけなのに。お腹がすいているようだったら、焼き芋の一つでもくれてやったっていいじゃないの。

そして隣のお母さんが大声を出してわあわあわあわあとなっている。私もそういう経験がありますが、そのときに、止めることはできないかもしれませんが。しかし、民生委員さん、それから人権擁護員の方、区長さんなど、地域にはたくさん尽力してくださる役を持っているそういう人たちがいます。どうしてそういう人たちに「あそこの子はこういうふうに言っていたんだけど」とか、「おかしい声が聞こえる」とか一言言ってくれないのだろう。

触らぬ神に祟りなし、これが今の世情ではないでしょうか。これを一新しない限り、私は虐待はなくならないと思っています。どれほどみんなが、こうしましょう、ああしましょうと言ったとしても、まずはベースメントがきちっとしてなければ、虐待も、非行もなくならないと思うのです。そうです、虐待で死んでいくか、それとも幸いにも児童相談所につながってもらえるか、それがなければ非行に走って、何か盗んで食べていくしか生き延びる道はない。こんな社会が、私たちの目の前にあるのです。

保護司は半径5キロメートルの範囲に必ず一人います。どこにでも声を掛けたら助けてくれる人、そういう人たちがいて、現状をよく知っている。そして助けるすべも知っている。そういう人たちと地域に住む方々が連携し、子どもたちを助けようとしている民間のNPOも有効活用する。そしてもう一つは行政です。それらが一体になって情報を共有し、連携をしっかりとっていかないと、虐待の件数が増えているから何とかしないと、とただ言っているだけでは虐待は減っていかないとと思っています。

少年院から手紙をくれた子は、仮退院決定から1年以上少年院にいて、そしてやっと関東の施設が空

いて、そこに入りました。たった一人で生きていく辛さ。虐待がないから一人のほうがいいのかなと思うときもあるけれど、寂しいですね。彼は働きながら4年前にきちんと大学を出て、そして神奈川の学校の先生になってくれました。

たかがラジオ、でもそのラジオに心があれば、皆さんの心の中に愛があれば、その愛が膨らんで組織として動き出せば必ず効果は出る。その意識付けと気付きを再確認し、この会で是非とも行動と連携を具現化していただきたい。

そして今日できることは、近くの人、困っている人に手を差し伸べること、その勇気を持っていたいただければ有難いな、と思っています。

私、ロージーベルを運営して本当によかったと思っています。今まで虐待の中に生き、笑ったことがない子どもたちが、ばんばん笑います。余りに笑いすぎて、「これまで笑い方を知らなかったから、笑いすぎて顎が外れそうです」と言った子がいました。でも、あの子たちは、必ずハウスに来るとこう言います。「えり子さん、俺だって役に立ってるすよね。俺、誰かの役に立ってるすよね」と…。「立ってるよ。少なくとも私の役に立っている。生きてきてくれて、私に会ってくれてありがとうね。君が笑うと、私、幸せだ」と言ったら、今度は「ありがとうございます。で、俺だって生きてたっていいすよね、えり子さん」と…。

「いいに決まってるじゃないの」「生きてていいすよね」「当たり前じゃないの」の問答が繰り返され、納得すると、次に決まって「ありがとうございます。あの…、えり子さん、俺、死んだら泣いてくれますか」と来る。「泣くどころじゃないよ、もう。ロージーベルやっていけないかもしれないじゃないの。そんなこと言わないで。聞いただけで悲しくなるわ」そう言う。「ありがとうございます」と。もう喜んで、満面の笑顔。その笑顔が可愛すぎるんですが、その笑顔に何故か涙がぼろぼろ流れる、そんな子どもたちの顔を私はしょっちゅう見えています。

その愛らしい笑顔が、涙のない笑顔になってもらえるように、これからも私は、このディスクジョッキーを続けていきますし、ハウスの運営を続けていかねばなりません。私には自分のできることしかできないけれども、今できることは何かということをして是非とも考えて、ラジオ、そしてロージーベルの運

営、そして、今はロージーベルを中心に子どもたちや困っている人たちを何とか助けていきたいと思います。ということで、県内の各NPO法人や行政も含めた連絡協議会を発足し、5年にわたり連携し困った人たちの役に立つべく活動したりもしています。

午後の分科会に登壇される花島先生もそうですし、チャイルドラインの小林さんも一緒に入っていて、宮城県全域で活動していますが、こうした取組は宮城県だけと認識しています。その協議会の中で、みんなで情報を交換したり、助け合ったりしていく、そうした取組が是非とも各県にできて、そして日本全体にその輪が広がってくれたらいいなと、そのように思っているところでございます。

子どもたちは、たくさん笑って愛されるために生まれてくる。それを知らず、虐待に遭い亡くなったり苦しんだりして、生きていかなければならない。そんな社会を、是非とも今日集まった皆さんで一新していきたい。もちろん、長い時間がかかるかもしれませんが、今日が一步、明日が一步、そうして将来に向けて、未来への笑顔のために、たった一つの笑顔のために、みんなで頑張っていきたいと思っていますし、私も微力ながら、これからも頑張っていきたいと思っています。できることには限りがあり、私は余りないですけども、とにかく持てる力をフルに発揮してやっていきたいと思っています。

ハウスの子供たちは、そんな子どもたちですから、しょっちゅう、うまくいったり、それから駄目になったり、それから保護観察中の子たちでも、うまくいかなかったり、腐ったりしているとき、そして何を言っても通じない、そんな時、私はすぐに「車に乗りなさい」と言って、ドライブをしながらソフトクリームを食べに行くか、もしくは音楽をかけます。

実は、音楽というツールが幾つも重ねた言葉よりも子どもたちの心に広がり、そして少年院の子どもたち、ハウスの子どもたち、保護観察の子どもたち、ひいては、私は名取で震災に遭いましたが、震災でまだ立ち上がれない人たち。そして今を生きるのに順風満帆にばかりいかない。必ず誰だって、学生だって、どんなに偉い立派な人だって、必ず苦しみがある。でも、必ず将来笑えるときが来るから、だから一緒に頑張ろう、そんな思いを込めて、先ほど映画のお話を副大臣にもしていただきましたけれども、子どもたちが大好きで、是非に、といつも言っ

てくれるこの曲を映画にも起用しエンディングテーマにした曲をかけるんです。そうすると、頑なな心が溶けていく。

その曲を今日いらしてくださった皆様へのエールとともに歌いたいと思います。Rosy ですからね、これで皆さんが少しでも元気になっていただけるようにと願いを込めて…。

聴いていただきましょう。

(DJ 風に)

—では、最後に— (朗読)

深夜、電話の音。

先生、俺。先生、元気。

あのさ、考えてみたら俺、誰も言える人いないんだよね。だから先生に電話した。

あのさ、俺、今まで生きてきてさ、俺のこと大事にしてくれたの先生だけなんだよね。だから、先生にだけは言っておきたくてさ。

先生、あのさ、俺、病気なんだって。でさ、もうすぐ死ぬんだ。俺、平気だよ。全然もう、全然大丈夫。けど、考えてみたらさ、俺のこと誰も覚えててくれないって、ちょっと寂しいなってさ。先生にだけは、俺のこと覚えててもらえたらって。俺、馬鹿だから、言い忘れちゃいけないって思ってさ。それで電話してみた。

あのさ、俺、親って知らないんだよね。里親にはボコボコにされて、「死ね」ってばかり言われてたしさ。でもさ、笑えるけど、俺、先生のこと本当のお母さんだっけずっとずっと思ってたんだよね。そう思うと、なんか心がむずがゆくなって、ああ、これが幸せっていうもんだなって、そう思うとさ、マジむっちゃ幸せだったんだ。

だからさ、今さらなんだけど言わせてよね。

今まで本当にありがとうございました。

お母さん…

(音楽)

「未来への Diary」

作詞・作曲；Rosy / 編曲；岩久茂

Guitar；桃太郎

(Recording Engineer；平塚学)

1；

例えば貴方が深い深い悲しみと言う

海の底に沈んでしまっても

例えば貴方が暗い暗い苦しみと言う

闇の中に埋もれてしまっても

どんな深い悲しみも

どんな辛い苦しみも

いつの日にか想い出に替わる日が来るから

立ち止まるな目を背けるな

真珠色の光に向かって

生きて行こう

今が僕らの

未来への Diary

2；

人はそれぞれに生きる道が違って

迷い彷徨い歩き続けてく

夢や希望孤独と絶望の中を

悩みつまずき虚しさ繰り返す

愛されたいと叫ぶ胸

愛したいと泣き続け

いつの間にか疲れ果て

諦めること覚えても

背を向けるな後ろを向くな

サファイヤ色の風に包まれて

愛し愛される人でありたい

Say hold on your one just a memory

この場を集ってくださった皆さん、今日はありがとうございました。拙いお話でしたかもしれませんが、一生懸命聞いていただきました皆様の心の中にある優しさの花を、愛を一人でも多くの方に分けてあげてほしいと思います。そして笑顔の花を、宮城県だけではなく日本中に広げていけるように、これ

からも一緒に頑張っていきましょう。

エンディング

崩れそうな毎日も
ただがむしゃらな生き方も
いつかきっと徒然に話せる日が来るから

みんなで、子どもたちの命を大切に守っていきま
しょう。
今日はありがとうございました。

涙拭いて前を向いて
強くなれる自分を信じて
悲しみの向こうにある
微笑みに会うために

立ち止まるな目を背けるな
夢叶えるその日を信じて
生きて行こう
今が僕らの
未来への Diary

生きて行こう
今が僕らの
未来への Diary

